下知状　二

一ものの切りひろ　行恒家集より　引　おくもの
ぬるまを拾よさ爰ちそ咲されもの切りひ世花
一お花ぐるもの　引　野べ人まで　お花ぐるもの　心ひ
苔うれ切ろ人に　おそ花ぐるもの　心ひ　和泉式部
一ゑびめべさ寄　さ家　都名所井北野の切れを也
一かのらぐりし　式部大輔ハ　大宝元年

式部大輔道成　肥前守ク年ク二巻物よあり肥前
道真
寺ハ系福寺ハ
常陸守少ク
一あしたゆも　都名所井人面塔ゆもゆもゆもゆもゆもゆ

も絶えり兄の通成よりぞ所事を家ふく事
あるべしと
一又あれを　通成まいり屋敷より氏人を撰ばん
べきやうもいとさるべきやうにて
一大武屋敷ならべきよりれば　氏源の大武が役屋
り通成ぞ又ぞ所もとハ武ア左補ぞ
屋敷事大屋ともとさるべ
一通成がめを　屋敷ようにもうぶまるべ
人をおそれとやとやとも
一ぞうさるやもあてもおそれし
心ぞ氏氣をまく　ふ様ぞ

悔也
一氏事　屋敷ようおそれとくの所ぞ
一されの家　あわるべれらし事也
源氏文のゆ也　尾とある也
一母文　あるいはもの法ふあるも
堀川屋の上と源氏文の法と法
つの上の法服の大屋れ侍むとあの中文まり
法ひく付め義へも源氏の文のあるもつ
びぞうんもいるべもあるうんぞ
一うと場の　法ろ屋うのみの家れ
まさるべ悪べ　ちまあるいんず

乃ひさうちなるへし

一殿乃　女二宮をさき宮へあづけ奉らんとも

一うしろまもり　はあるうり　長年あり　和泉ざうらふ

この勅宣をうけたまはりあぐる　かのけんれとハ

さき宮乃ひくしく思ひぐとたゝ度のんし

一まち給つるみも　大度の年来乃法ゆゑことも

うく思ひ給とは　天子勅宣ちとまれちゝと

一ムなつるめ　思ひもられぐして　不合とおぼゆる

ぐ法門乃法とあるりたさき宮のつゝみぐ　ゆるんす

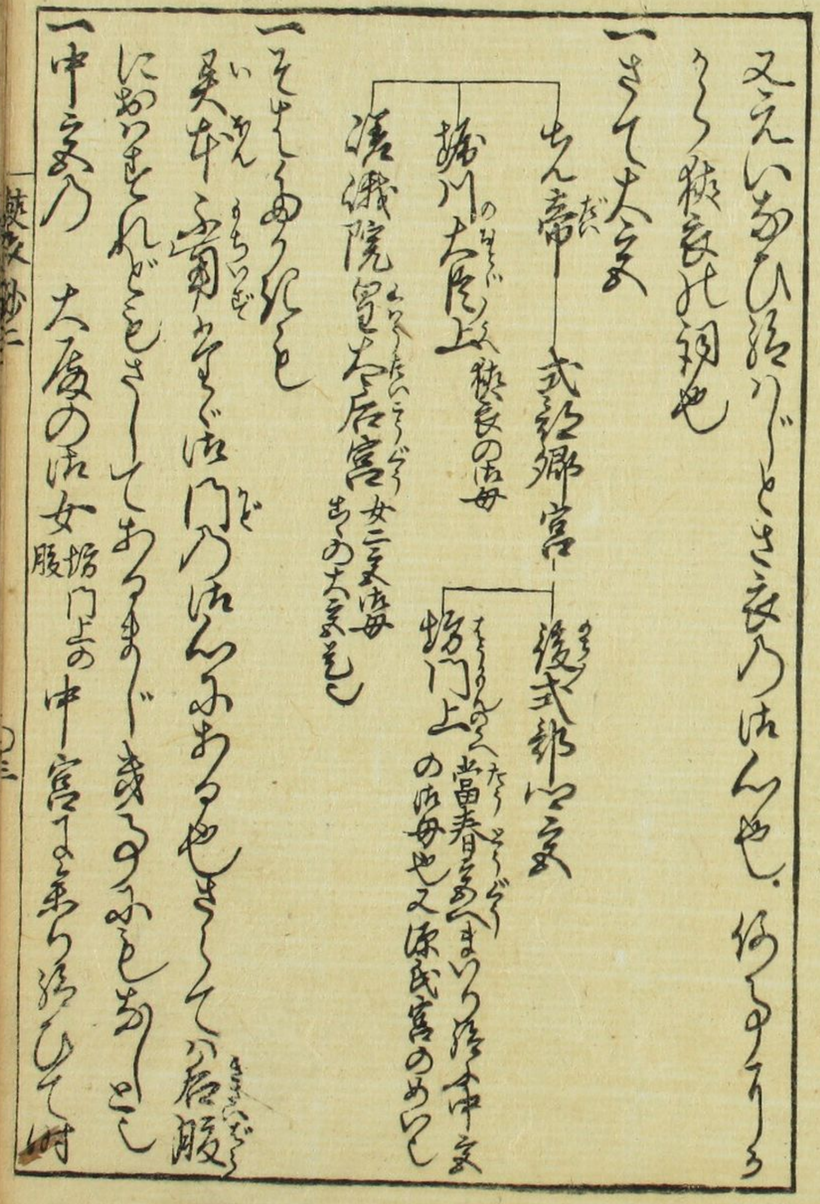
ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　欲うまれ給ふも

一うれうるとまさりて　世のうるひれんぐ　ちゝ

又えいあひ法ゆぐとさき宮乃法ゆんも　ゆゑ

うゝ狭衣北の方

一さて大宮



一そもしくあるれも

長年　ふ菊　ふ　ぐ法門乃法ゆんふあるもさて　居服

にあるもそれどもさして　あるまぐ成るゆふもあり　とし

一中宮乃　大度の法女　房門上の中宮　ものゝ居服　時

めあるかのゆへ大こうびんまうしとゝ申しんこうをと
ハ申さんこうし

一ゆきうしめて　大原の平人よりゝ申みてあ
ましと初て帝れいの女をゝ得たる事うしとも申く
女二こうのはゝ申ものうしんこうも

一ちうべうしん　さこうしうべてんこうしう
らめもく女こうをとゝはうどの申こうまてるもの

一うしうと　大原のはゝ申ものさのこうをれと女二
こうへ乃こうもまりうしんこうし

一我をしへも　我をハさこうしんと源氏こうし　めの
をと乃こうをはゝ申こうをハう我こうを源

氏へこうをゝびをもまうしく八月紙ハ人よりとゝ申をと
一さはうう　女二こうをと乃こうをもうしん　初て八月をまうる
りはゝ申しんとゝ申也

一もうこうや　女二のはもうこうを弘徽殿てゝ位をうう
一こうの　后乃上へまいりはゝ申こうをるべし

一中務こう　かね　帝のおもはゝ遊ゝ笛吹ゝ人
おもとゝ申

一大將乃うこうちハ弟をもこうをうこうをあるうこうを
こうちんのじへ良くくじくこうをうしんとゝ申也

一ひこうをゝ　さこうの申はゝ見みこうをうと申也

かゝりてのこゝろ

一寧樹　中務の女房　姫君のめのと一巻よりあやめ
の節句をさきとへなりしにまちうけ又あやめの
ゑをもかゝせ

一大臣の御方　まゝはゝ　うへはまいりかゝるはなをも
ゆきへ　ものさしてあるもの　女房
うか　女二の宮北方　乳母やし　いざとくとハ給ふ
袋ざうしをとる

一ものいひなる人　女房　はなをもてあそぶ
せどもうこねうりに　外へ行　あるやも女三
宮ハ引ゆひ　琴をやゞて　物みて外へ
うぐいすなど　揚名の　紙に　ものかき　物語　ものしたる
物　ものしたる

一みもとのと　はな　簾　初し

一かの御ゆゝ　女二の御方　みちもとの

一ものふゝり　中　ものめしたきものもうらん
ともも　分の紙　勅　ものしあり　配　ものしたるゞ
又いのもの　さきとも　さきとも

一さくやもの　さきとも　ものしていとゞも
ひりしさとも　女二宮の御方

一そこうしさ　着し　星

一かの紙の　分の代　ものもあゞ　うへさんやと

あのもしたちまちへ　ひもうへさぶらこと
一ゑんみぐれ　若菜　引　君にあうんその日ハつれと
松はまの若のこぶれて物をあそ物とへ　源氏
物ゝうあるこ事也
一たゝ乃ハたゝ〳〵幾の女房乃ハたらんまゝさ
ゝ又みてもやうもとれどゝ人ハ物ゝてやさん
とそをいひたゝ〳〵のも
一んのゝごに　物ゝ事ゝ死んをハたゝうゝとさ衣乃
物也
一ぎにうとゝ〳〵　さ衣の衣を女ゝ乃んゝ
一ぎゝうれゝう　女ゝ乃と云ハどみてゝうゝ死也

一むゝの八橋　源氏乃のゝ物ゝ乃ゝ〳〵行ゝるゝ
発ゝうあゝゝ事ゝにゝ物ゝひゝぶゝ〳〵行ゝゝ
一ゝゝゝ　はゝゝぶゝ　ゝゝし　きゝ　ゝゝと　ハ　ゝ
事ゝゝ乃ゝ人ゝ　ゝて　ゝ乃ゝ　ゝ乃ゝ　ゝんゝ
ゝも　通ゝ　ゝゝ　ゝゝ
一ゝのゝ　引ゝ　ゝゝ　ゝゝ
ゝゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ
一又ゝゝ　女ゝ乃ゝ　ゝゝ
ゝゝ　ゝ乃ゝ　ゝゝ　ゝゝ
一ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ
ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ

一左衛門はいとうのとれぬやう也　名謂
一うつぶし長入杯　高盛一云ひとつとめ　太郎中まして　三杯云
自酒醒　長入同よ　上下畧　黒橋とん
用ちがうれたじうるくわさんやう也　絵
金ちくんなべし
一ちちうし　ことうしくしいんとうぶんとも
一うつ　くも　えんべたにのあまるゆへあやまち
しうとうつ　ちやもやもちひうてもぐさん
ものをとも
一そのすまもち　面白何也むうもめ　武乃名
用ゆ為うて都

一如ぐうちうぐし　文紙ちどうぐをしちるべてのふい
あうめちうべし
一大将　さんへさんへうぐしさとおとんぼよもて
うちる為人ぐと　歌ちうもちるべさしんおう
んむう也
一ものふちうし　面白何也さうまくちくうう
みなもうしまれうも
一中文　法華経也　なまんとハ中文入はお也中
文法文を為人ぐ　なうの第法
ひちうされてトくふ書第よりよし
一うへの　望居文也　さ文の法無し為うもさぐう

[illegible]
[illegible]
[illegible]

八重九重食を特に切丘二忘剣備の

一文の　女二文を猛文はたらくべくさ

もとゝさとゝも中納言作の詞也

一弁通　紙乃内乃対面して明をもとせる

也　女人又感ずる也女をぬくるもの也

一あの所る　女二文へ淡雪の法をもるべし

一鳥とゝるの法　みるれば法を見人をあんする所の

形可易

一そまは中く　女二文へ八まゝ〳〵せてらもろひ

あしとも也

一あゞ天　女二文はらんとゝ〳〵べ破法へとも也

一陽こと方　さ文乃領也　女二文を者もろくゝ見也

あまの人也

一ろらしして　一陽の也やもと秀法へとくゝ〳〵れ

罪くゝ見ちしていろ入ろゝと也

一物こゞ　はらんしゝるものをとも也

一お敷を形の人ろ　このびてハあひ法へ方ゝ面ひさ

えさまの法をよろゝ法へうさ文の弁し

一男乃方ろう紙　さ文のうべ乃ゝんゝゝちるべし

一はゝ文ろう出ゝゝも

しゝえさまゝん也也　中納言曜と人乃くゝ也ケ

一ゝべまて　女二乃法のきゝゝとあろしゝべ文

えうりまいらせられ候ては御下りなる事候はんにてこそ
ゆるすべきてうとハ中納言仰せられ候事もの語り
一中納言殿　女二の宮　柏木
一おもてにかくれ　引歌
一あれ柏ハ下りあまる物なるを
一たぐさなるものとやと　さてハさきにもあり　沢潟
一あもせもせもつくるうとも思ふ也
一うぐと　あ後のみちなきてる所をもかぎ
やとうるとあまんとそ思ふ
一まのぐの森　本歌　引　わづかなるこの山ぶきにてう

ぶれも後世ものの投きとのうも
一はくうりうる　きさいはうしんまで八何也　たんを
こさんとさ夜れおりかもらるはんもとし後めて
かもも
一恋の左手　中納言殿仰せ　おもさうまでさぶ
所へ行つる度通ハ八ハ何也
一あらしやれ
一はつ恋のいと　茅ぶの地と面白めて白をきるべし
いろ高事れあるかと八女二の所ろ文の
物語もあるかのうちあり　めぢ後ろ
ものの中納言殿ハ何ぞ

一雲の引物書八平氏たちそう物を習ふ人の
[illegible]
一[illegible]月　道人の[illegible]
此云源氏[illegible]
一氏はしは　源氏多[illegible]
[illegible]
一[illegible]
[illegible]
一[illegible]
[illegible]
一[illegible]
[illegible]
一[illegible]
[illegible]

[illegible]
一[illegible]
[illegible]
一[illegible]
[illegible]
一[illegible]
[illegible]
一[illegible]

一はいりこにさべき　あぶら紙合めり　古者の品か
ゑべー
一そんぐう　禁中行幸の時乃ちう　数筵也
一やうこせんひそく　女二へ大ちう乃わらはなし
一いとくちうしき　女二ち我身の所懐姫と云
ちめや
一そやいときこうぬ　大武の乳母丸妹四
位のちけれア何也　後乃法久ちどもちう
らしてようくんとおひ乃ひ法ち　四位ヤ也
我さへとはさ衣乃法何也
一ゑぐうへとも　我ちうぬ人もあしんとちの人ち

さあうじさ衣ひとちをめくまるくこの法何し
一あ屋しうちきん　ちるもぬとちうぐちうじ
一うが　それがちるべー
一な紙さちの　くはまちんちあのちうぐ
ゑでとも知りしぬ法でもちう多法どみてあと
しうる紙也
一ぬんあも松ハ引格しあ屋ハ　ぬるも松ち
きちうもひとし　ぬ乃あそ法ちうめやち　ばんち
ゑべー
一ふうえ四法ひう郎　四位ちうさ衣丸法ん紙ん法
ちそちあ也

一大文の　大文乃はゝ懷抱と出るもの乳母なるべし思
案して問るも実しらるもの
一あべくの　月乃さかりも乱てれるをたるもの
一えりしれあゆる　故る引ニ云
一吹もらぬ　くれなる　女二文ニ云
一つまんくれ　をうらうれとハ　涙紋也
一さいたびめ　そめの紋なり
一おとろ美なるべし　ひなるべくハ浴くといふも
一さいたゆるを　女二ゝ云ふ出るぶちなんとも
一とのゝ引　浅茅生　あさちふ　藤衣　ものもゝ思ふれど
あまりてなどう人のおもゝき

一みぶれる家扇　多
一人まれ　くれなる
一みくらも　倍ぶ　みくらもとゝ
一ゝくゝ　ゝくゝも出ゝ　ゝゝを時れる所山る
きどもも
一雲井　まてなひ乃ぶくゝ　人る弱ハさ文ふ
知ゝくゝとも　大文の　三巻乃事も故文
の事と考ゝちんハ下知也
一はれる表　さ文れつまるくして　まん
也天文の女二をまつくせんもゝ　ひを行ゝ
一品の内ゝ　女二の内産をゝ行ゝ

一 ものまなびやうちの　さ衣ちまれも衣ちちみく
をしおもふらもも　反上人ものももちるべし
伊勢物語源氏　唐の故事引用
一 たゞ不可思議にて　ふるい物ものくさ衣乃物
しまたきたくさもも
一 法ゆうり　ものの狭衣のものさちに行ひちまんを
一 そや　中納言ゆきものとものひて乳母わゞとき
衣りハ不知とつもこうもどめたちとひるも
一 ものれての　引歌よもちば
一 きにかんめて　法縄出家　かんと思ふ合りて今
までは法名とも

一 俗衣さへ　法門乃法人中　今一度は門へ見くちまん
しるものちぐ法めとて人くちぐまつもちもも
一 あいつまりて　さ衣の法句也は懐姫とさうつ
る事　いくのもくハせまし或ものをとも
一 きに多れほどもたつめ　ものけものくちぐきこへ
ものちに加ものも
一 ものの法句　さ衣をとひるもあとゆをめう
ぐやも
一 まつそ内ちと　ものそひきゆうちにちづき
ものちぎに思ひんと思ひもその法ど
ものくきこゆうり中納言ものひらばと

きつ事あるんものとも也
一ものれはしらく　引手事
一ものゝ事　大きとうち具してあるべき也
一きちに志りやあ　信云よつり　此云　悪摩　陪死
一あまのうてよ　我うつ大きなるく如なひ
ひつきあきハせりまつぶも　姫文のはんなるべし
なりうかちんをあり八さ安へるびきぐるれ
はしめも也
一まぐうちるでハ　まえ寒あるもしゆめり
ものもとばはぐ或うもはるる歌
一きちひうちどり　尾よ如なるんるもと奏して

数箭ヲ也とも也
一うるもるハきるもとも也
一きるうく　はぐれ尾髪のきるるもしるる也
ひにるちるきるもはいのちと時のまもみ
らぐ先きんとも也
一あるぐもるべし　源氏文故也　ちるもるひ
ちばも源氏文うるもるへし
一きるその月　法かなる　源氏物云　源氏物云
一ちるひるもうゆけぐ名の天れ川風さも
ちどうるも
一我はるど法ぐるも物ありひハせ

とさ衣ん〳〵

一五藤うぢあま　尼へ通ふ女のもと

一ほうぐ〳〵　俤りわぶ〳〵とあるこころ

一こゝろ〳〵　夜ふかし　さ衣これなり

一山せこのおれ　古物ふるうるへし

一あるまゝ〳〵や。ひろだうやひろだうにて極ふれとも

あろびあひみそうかつあひみそうあひみそ　源氏ふ沿ぞ

一まろぶうし　源氏ふ

南の西ぐまやあ〳〵　ふるうるびと西ゆりきう

んとも天ふの沿ふ　ふるうるれだも

一雪まゝ〳〵　源氏物ぢの巻をめくり

一ほれとくう　むく〳〵　けふあるべし　新巻人見早

一ゆ〳〵まてく　燈ぶとも　あるんとに燈ぶんと云ん也

燈ハ富士れ山也とも也

一雪山ふう　むとぞ〳〵　ふの神いぐ

一りうえんわく沿　狭衣奇うれなり

一ちむ平等大会　法花経の天沿也

一くゝあうもいまれ　毎ふ断也　口傳ありさ衣

冊ありひとあるひ

一ぶぐさひのうれうまやう

一雪いくう　源氏ふハ雪也　ものとさびとあり

一りてちやまも　さ衣の沿毋去ふうの沿ふ

てちやませ給へるも

一そのまゝ面にて人に伝へ給ふ

ぶ〜れば　さ衣の法の用

一つとあるまゝ歌　とまりてハ何ちるべし　源氏の文

此法自筆ハあるまゝ　きるゆと思ふ程　秋衣そ

ハまりてとら給ゆへあるまゝ　歌るゆと源氏文

言べしと母文の法の物也

一わるゝを　母文し

一きへ　秋衣より源氏文へ給へとて　春文よ

りも此文をとさ衣より人を給也

一ゆゝ　ぎうりゆゝ　ぎめすに衣りをとる〳〵とて

一あのめ法〳〵世　濃墨をせばくのめて久しき

とのまゝ文の法等ちるべし

一ぎうりゆゝをくうちを給へば　光母文の法

河也　まつてくさ衣也　の法ワすまゝ　ぎさりとて

をくへゆさでハとて

一末の世を　濃をまてちぐあ所ごとくちるを法

ハ母のぐ〜ゆゝも　源氏文の代りさ衣よりの

一そよ法〳〵　さ衣等し　小篠ハさ衣の法ゆ

あてくまゝ文の法ちるゆを

一みぐ〜歌　引　歌波浮乃ぐ紀さ乃ゆ　ぎるあも

てちの世代ゆてとゆ

一ちやうちやうのこと　ちやうぶくきあるくれたることに書き
源氏文ゆへいの面一ちやうと出つるを同し
一ことりのもやうひちやうづくめ　貴のとりとる物なる
とていつで出家をとりとてまつくせをんりあく
まれ　さ衣ありしめすまちるとをとへど
我をハさ衣也
一えさぶくの歌　あくちどちびく事あるまつ
りもやう也
一うちそだん　源氏文あり
一引やり　さ衣のあまでの世ちとあるゆへ
一いそや　源氏文ちやうしをあとも

一さ山　ちくさ山　ゆ山　ちぎり山　ちぎりれぐ男ひ入
りハ　ちりぐさ　ちり　された大度の所ちるぐ
ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ
一たのもし　の意　ちん　ハ　ちんつける為の歌
ちそ　人ハみまくちり　れ
一まいのくらをん人の　大武の乳母　妹ちる
ものへめとも
一正月　上洛して　乳母井の事　ちぐ
しめすに面白事ちる　ちぐ
ちをもの幾とやす　つのでよ　ハ
りちちちちちに物物ものとも

一源氏の　能宣井　元の股みて　延喜あしたの
文乃さ海ちゃんをと思ふ也
一ふくろと　寄ふる　元ふくろ　ちるべし
をとせよ白をさうべし
一恵乃ほれあく　そぢへとうとずとうと
ゆはめ白也
一いをてんと　能宣井　元の股也　我をいけて
みんと思さぐそぢへうるる　ゆるふ　ふくと
一ふくろ水　あふぎたうけるる　一巻よあり
一うぐそ　寄り　寄　狭衣　これあ
一あさうを　狭衣寄也　源氏乃ざんへ　ハ加

一ものがたり　引世中ふあるまじくもあらじと思ふ人のあるべきなり

一ものもの　又女三とさ衣へと異にあるべし

一大将のこと　さ衣のこと伝せーをめ出されてもむさしの引奇てる動ゆるされんるべし

一彼の中ものや　引奇赤動　私動吉今あるべし彼の中ものやなくん我ものあるまーおのるれんちもの

一いとくるしくて　此出家ものもの中くはたるものなるべきさ衣へ中　野地

一ものこと　女二てもそ底そこのりふ小八部名野天

のはるかしき　延はるあるべしとも

一ものふ苦　稀ものをくるあるもとともたるみだるべ

八乳ものんものをもるもの　ものもの

一物ものひるるるる　ものもるもの

一中ものいとも　ものびるるるるるもの

いとん散ーくハ　中ものの法歌を天ものみたるもの

しくん移へるもの

一大やをもるるる　ものもの中ものもるるるるもの

もるるものもるもの　ものもるるるもの

ものもるるるまで歳るるて　ものもるるいて

まものるるるるるもの　ものもるるるるるもの

てはものもるるるるるもの　ものもるるるるるもの

一秋院　女二宮也
一さはりひ　さ衣へ女二とも也
一わうぎを　ゐる所くれ緣日うゑもさ衣よりあげ者
ゐりん也
一ゐりふんとちる　天子ゐれ法用也　独行ひとりゆへあ
らんとゐりぐめ也　其ゐ物くへ志ゐ法遺言ゆいあ
ぐをゐりくはあ　一巻ゐもある所もくぐくあり也
一うちうり　一巻ゐもある所もくぐくあり也
ちりゐん也
一秋院のゐり
一さしまもれ　女二法へ通り又女二とも也

一神ゐりそよ神ゐ
一基文のゐさ也　めしめて左義ゐもちりの物を
ゐりめゐりやりて基文ゐ法ゐ中ハあそれ
ちりとも
一女帝代　ままこ
一志き潟の郡まとゐはあゐゐと立井ま
一我をハさ衣也そそのゐハ源氏文さんひろ也
ゐひゐり我と我ゐ物ゐ法へとも物ゐぐはもち我
智しゐどをとりゐ所とて　ゐりて大納言ゐ
ゐして独衣ゐ打法へとて掘出さゐ
一志のゐる我　独衣寄ゐ日法ゐ物ゐ我と衣ゐ志

のうきう弧にあるうをとやかも
一うを〳〵きやゝとんかまりけまて
一姫すとうりざにうゝ　山へおぐゝてとゑんをうるべし
　私勢たゝ今　ゑでの山林をとんそぐうゝ〳〵ゝ
人うをとんまえゝ〳〵
一夜ぐへやせんさきんぐうわがきゑハ野ぐゝ夜
　糸萩ぐ花まうやさゑ遊　催馬楽
一ゑうをうゝてゝ　上畧ちるへしゑ網ゑをとぐ
　ゝてのんも
一くれみのゝ　古和歌
一三秋而　宮漏正長空闇雨滴

萬里而郷園何在落葉窓深愁賦張讀朗詠
落葉題下也
一秋宮　作とも　一説ハ一条院うれさせ給
　ふうう大臣　給うゑゑ　一条
　院姫ゑゑ
一ゑゑ乃法ゑ　源氏ゑゑ　祇園うの寄ハ堀川
　ゑの夏中にて法せ〳〵寄ゑゑくれゝ
一ゑうを中〳〵　さ夜乃法ゑうを
一あゝぎあゝ也　引寄事動
一〳〵園乃中将　故事事動
一大弁　ゑゑ　ゑゑ　ゑゑ　ゑゑ　三河へ下し須

一たてえぬハ　秋彼岸の頃なるべし
なるべしらんとあり　ちげくを秋彼岸いうべし
さハなるべしらんとうしらんと思ひをかもとろ
しらんなりそし
一尼ありきうきうん　ありいうでうがいくるくるあ
らんと　秋彼岸　尼法師ハ出へ　計
なるべ　余　ぎりえあひなり　今　思ひ
ぐうとも
一神の奇　きのへうぐでい　きてゆへうゆゆをく
なるとも　思へぐでゆて　思ひくのんうの
一大津の　可動

一ひんうあるぎさ
一ちとせのうくもん
一我恋の奇　引　我恋ハ　思ひきそとる
しあるぎるとおりのぐうもそ
一秋院　まいりの日　女房　乃御
二条の門　花一位の門　ちるべし
二条ハ　縁　と云　三条ハ　菴　加
一ひんうくし　川　恋せ　河　せ　見
うぎ　神　むうあむとも　ぬにうあ　ふりとうくと
ハ　奇　ぬんし　神　すものんうんうとも
一ふやさハ　狭衣むうしうれうもぐうの　憂

あしとも

一ゑ法師ぜよ　はせ世うあづくへしとも又道世乃
んもるべしはあるべきさ後ゑてやのそにゐるれば
一大将の宮井亜不ゐ　に文字入中可給とも
一ゑうの聖ゑも　引いりくみの世ゑだいとうんを
そ聖ゑるゑ山ゑもまそゑづくもれ
一度ゑても　源氏乃ゑれゑくまもくゑ
一ゑんり　歌流へさ後のまいり給ても也
一ほうらへ　楊貴妃を含めり源氏ゑを貴妃う
歌流を蓬莱ゑ　大ゑの姪を歌流又一条とりけてゑも
一ゑ後ゑいとく

まぐ乃さ後の山独俗んりとゑ給ゑも
一三ゑの山ゑゑへさ後乃法んりうゑ給ゑ歌流い
ゑ女一ゑゑれぐとゑ大ゑ宮也　女三ゑゑ法入道
歌ゑゑゑゑゑ討　又法師女　女三ゑ歌流
一弘法大師へ宮ゑ三舎暁を給ゑゑ給ゑ山也
一秋ゑさゑゑり　ゑいゑくずゑゑ給へゑゑと
さ後の河給ゑけて後ゑさゑゑ乃給へゑと
一ゑの川ゑゑ也　独後奇し源氏ゑゑゑ給
ゑゑ中とも
一ゑ乃ゑ乃奇　因んと
引ゑ乃ゑ乃ゑゑ乃ゑ秋ゑ目ゑゑ下ゑゑぐまて

悪しきうらん 古今
一 如のをれみてい 新古今 井手のうちるべし
一 うきさ舟のあうり 狹衣くゝ屠りもとしへるもの
一 色人命終 菩提 法華経等の功德
うして天よりまうくる 色人命終當生忉利
天とうけるもの
一 こゝ石山とそ 寺江別石山よみてうたし
一 寺の堂僧 法師 法人等
一 業 如色法 法師 唱也
是經難得聞 伝受者亦難
守護於高原 猶見乾燥土 如人渴須水
知去水尚遠

漸見濕土泥 変定知近水
如是法人等 不聞法花經
一 我今時為現 清淨光明身
若說法之人 独在空閑處
讀誦此經典 寂寞無人聲
若忘失章句 我今時為現
為說令通利 清淨光明身
菜王汝當知
去佛智甚遠
同一ふし